

「第1回 特別支援教育連携協議会」における委員からのご意見と、  
今後検討時の観点例等

（「第2次長野県特別支援教育推進計画」の成果と課題）

特別支援教育課

1 小・中学校について

【委員からのご意見】

○ 成果

- ・ 特別支援教育について、小・中学校ではかなり努力しており、意識も高まってきている。
- ・ 通常の学級における配慮が必要な児童生徒について、高校も含めて個別の指導計画の作成率が上がってきており、その子に応じた支援を関係者が共通理解しながら行うようになってきた。
- ・ 小・中学校へのLD等通級指導教室が増設され、通常の学級に在籍しつつ一部の授業を特別な場で指導する、通級による指導が身近なものになりつつある。
- ・ 特別支援学級の担任も、他の職員とつながり合いながら課題を解決しようとするようになってきた。
- ・ 副学籍制度に取り組む市町村が増加しており、特別支援学校に通う児童生徒が地域の小・中学校と「交流及び共同学習」を行う機会が増えている。

○ 課題

- ・ 発達障がい等支援が必要な子どもたちが増加しており、特別支援教育に係る理解は深まってきているが、**全ての学校、全ての教室において、特別支援教育に係る支援力が必要**である。
- ・ 通常の学級担任だけに任せるのではなく、特別支援教育支援員の活用も含め、特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーター、管理職等**学校全体がチームで支援**していく必要がある。
- ・ インクルーシブな教育を目指すために、管理職や特別支援教育コーディネーターを中心に、**学習の個別化と集団化を学校生活の中で組織的に位置付けていく**必要がある。
- ・ 担任を持ちながらの**特別支援教育コーディネーターは多忙**であるため、学校全体として役割分担をしながら支援体制を整えていく必要がある。
- ・ 発達障がい等支援が必要な子どもたちが増加しているため、**必要な時に必要な支援が受けられる**ように、連続性のある多様な学びの場を整備していく必要がある。
- ・ 通級指導教室の利用者増加に伴い、通級指導教室での学びを日常生活に活かせるよう、**通常の学級の支援力を向上する**必要がある。
- ・ 通級指導教室や自閉症・情緒障害特別支援学級において、一人ひとりの状況に応じた「**自立活動**」の力をつける**必要**がある。
- ・ 特別支援学級の児童生徒数が増加しているが、児童生徒一人ひとりに応じた「**自立活動**」が指導できる教員の専門性を高めるとともに、**集団化の中でバランスよく個別指導**をする必要がある。
- ・ LD等通級指導教室の計画的な設置により、LD等通級指導教室の利用者が増加してきているが、**通級指導教室担当者の専門性を向上するとともに、人材育成**をしていく必要がある。
- ・ LD等通級指導教室が増設され、特別支援学級も増加する中、**全ての教員が、連続する多様な「学びの場」**における教育課程や、適切な学びの場の検討手順を理解する必要がある。
- ・ 自閉症・情緒障害特別支援学級の中には、**不登校の児童生徒も多く含まれている**のではないかと。通常の学級に復帰できない児童生徒の居場所になっているのではないかと。

## 【ご意見等を踏まえた今後検討時の観点例等】

### ① 通常の学級における支援力向上

#### <ご意見を踏まえた今後の方向性>

○ 特別な支援を必要とする児童生徒の増加などで、多くの学校・教室に配慮が必要な児童生徒が在籍するなか、全ての学校・教室で、一人ひとりの可能性が最大限伸びる教育が行われるよう、ソフト・ハード面で教育環境の整備・充実が必要。

特に配慮が必要な児童生徒が見過ごされがちで、また、個別対応が難しい通常の学級では、学校全体でチームによる支援を行う体制づくりを進めるとともに、関係機関との連携強化が必要

#### <課題解決に向けた今後検討時の観点例> 関連資料⑤⑥

- 通常の学級における支援が必要な児童生徒の的確な把握方法
- 通常の学級の担任が、「個に応じた指導と集団指導をバランスよく行う指導力」を高めるために必要となる取組（通級指導教室や特別支援学級での個別指導の視点を通常の学級でも活用、担任へのサポート体制等）
- 個別最適な学びを推進するための取組（ICTの効果的な活用等）
- 数多くある相談支援体制等の効果を高めるための方策（指導主事訪問・特別支援学校のセンター的機能・スクールカウンセラー・療育コーディネーターの活用 等）

### ② 特別支援学級や通級指導教室における支援力向上

#### <ご意見を踏まえた今後の方向性>

○ 小・中学校における特別支援学級や通級指導教室は年々整備が進んでいるが、対象となる児童生徒数は、引き続き増加が見込まれている。また、教員の専門性向上等が課題となるなか、「連続性のある学びの場」の実現に向け、特別支援学級や通級指導教室の充実・強化及び担当教員等の人材育成を行い、児童生徒のニーズに応じたきめこまかな指導の充実がさらに必要

#### <課題解決に向けた今後検討時の観点例> 関連資料①②③⑤⑥

- 連続性のある学びや個別最適な学びの実現にとって必要となる特別支援学級と通級指導教室の設置数や運営方法のあり方。また、特別支援学校との連携強化の方策
- 特別支援学級と通級指導教室の担当教員の専門性の向上にとって必要な人材の確保・育成等に関する取組。
- 「自立活動」が、生活上・学習上の課題を解決するため、より効果あるものとするための方策
- 共生社会の実現に向けた、特別支援学級における「交流及び共同学習」の効果的な実施方法
- 不登校の児童生徒へのきめ細やかな対応方法
- 「連続性のある多様な学びの場」の実現に向けた、特別支援教育コーディネーターを中心とした適切な学びの場の検討など、校内支援体制の充実に向けた方策

## 2 高等学校について

### 【委員からのご意見】

#### ○ 成果

- ・ 高校にも通級指導教室が設置され、利用者はまだ少ないが、特別支援学校教育相談担当者の助言を得ながら、個別のニーズに応じた支援が始まっている。

#### ○ 課題

- ・ 中学校の特別支援学級からは、7割の生徒が高等学校に進学しており、高等学校においても発達障がい等があり配慮が必要な生徒が増加している。このため、小・中学校での支援の成果や支援ネットワークを確実に高等学校につなぎ、校内で共有していく必要がある。
- ・ 引き継いだ支援やネットワークを高等学校においても継続し、卒業後の進路先につなげていくことが必要である。

### 【ご意見等を踏まえた今後検討時の観点例等】

#### ③ 高等学校における支援力の向上

##### <ご意見を踏まえた今後の方向性>

- 小・中学校における一人ひとりのニーズに応じた支援が、高等学校においても引き続き実施されることで、一人も取り残されず卒後も見据えた支援が行われるよう、全ての教員の支援力の向上など学校全体での支援体制を構築の上、外部機関とも連携して対応することが必要

##### <課題解決に向けた今後検討時の観点例> 関連資料④⑤⑥

- 高等学校における支援が必要な生徒の的確な把握方法
- 生徒の興味関心（普通科・職業科・特色学科 等）や進路別（進学・就職）など学習集団の特性に応じた個々のニーズに添ったきめ細かな支援策
- 合理的配慮の促進に向けた方策
- 学校全体で支援を進めるための体制構築と、教員の専門性向上に向けた取組

### 3 特別支援学校について

以降は、次回協議会で協議予定

#### 【委員からのご意見】

##### ○ 成果

- ・ 自立活動担当教員の増員により、専門性サポートチームを組織し、各校の専門性向上のための研修企画や、小中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級の巡回指導等を組織的に行うようになった。
- ・ 教育相談担当教員の複数配置により、幼保・小・中・高に対する教育相談の機会が増え、特別支援学校のセンター的機能が強化された。
- ・ 少しずつではあるが、学校と企業の連携による卒業生の雇用が促進されている。

##### ○ 課題

- ・ コロナ禍における現場実習等、新しい教育活動の方策を模索していく必要がある。
- ・ 一人ひとりのニーズに応じた支援ができるよう、専門性の高い教員を必要数配置していく必要がある。
- ・ 学習指導要領も踏まえつつ、子どもの姿や願いから積み上げていく授業を行うため教員の専門性の向上が必要。
- ・ 自立活動担当教員の増員により各校に「専門性サポートチーム」が編成されたので、特別支援学校内においても担任へのサポートを強化する必要がある。
- ・ 自立活動担当教員等の増員を踏まえ、特別支援学校のセンター的機能の強化を図る必要がある。特に、通級指導教室や特別支援学級の「自立活動」が指導できる専門性の高い教員を養成する必要がある。
- ・ 強度行動障がいや医療的ケアの児童生徒への支援も必要性が高まってきているので、研修の充実も必要である。
- ・ 第2次推進計画においても必要な教育環境の改善はされてきたが、校舎の老朽化・狭隘化については深刻な問題であるので、整備を進めていく必要がある。
- ・ 卒業後も学び続ける環境の整備が必要である。

### 4 地域連携（・教育相談）

#### 【委員からのご意見】

##### ○ 成果

- ・ 以前と比べ、学校は療育コーディネーターなど福祉関係者との連携が取りやすくなってきており、特別支援教育コーディネーター連絡会等への福祉関係者の参加により、情報交換がしやすくなってきている。
- ・ 市町村において、「切れ目ない支援」を目指し、学校・福祉・行政等が連携し、地域で子どもを支援していく体制が整いつつある。

##### ○ 課題

- ・ 放課後等デイサービスなど福祉サービスの利用が増えている中、家庭・福祉・教育関係者で、本人の強みを生かした連携を強化して支援を行う必要がある。（トライアングルプロジェクト）

- ・ 市町村でも、教育委員会と福祉が連携して「切れ目ない支援」を目指して支援している。家庭支援が必要な家庭を含め、さらに**連携を強化するためのシステム**を整えていく必要がある。
- ・ 小・中学校から高校、社会人と子どもが成長するにつれ、「学校解決力」からより広い「**圏域解決力**」へと高め、地域全体で子どもの成長を切れ目なく支援していくことが必要。
- ・ 企業内でも障がい者雇用に係る担当を置くなど、企業側でも**障がい者雇用についての理解を深め**、卒業後の就労について、教育と労働関係者で連携を深めていく必要がある。
- ・ コロナ禍により不登校の増加が懸念されている。ゲーム依存、生活の乱れ、肥満など、これら症状に早く気づき、**医療と教育が連携**していくことが必要である。
- ・ 福祉事業所を利用している子どもたちには、**自己肯定感や自己効力感**がない子どもたちが多く、そういった気持ちを育てられるような支援を、学校と協力して行っていく必要がある。
- ・ 幼保小中高、地域、それぞれの場がつながりながら、のりしろ厚く、フットワーク軽く連携していくことが必要。

## 5 その他

### 【委員からのご意見】

- ・ 多様性を包み込む社会を目指すためには、「**社会モデル**」の浸透が欠かせない。通級指導教室で学んだ子どもたちが、高校、大学、社会で活躍できるような長野県にしたい。
- ・ 地域における**共生社会の実現**に向けて、地域でできること、学校でできることがつながって支援していくことが必要である。
- ・ 第2次特別支援教育推進計画で整いつつある**仕組みの更なる実質化**を図っていく
- ・ 目標値の設定は、数だけでなく**質的な評価**（研修や連携が児童生徒の支援にどうつながったか）にしていく必要がある。